

雲井竜雄を憶う（谷干城）

墨田の花は酔うべく

蓮湖の月は吟ずべし

想う昔連騎豪遊せるの日

桜花瀾漫として月沈々たり

錦城の春は暗し辛未の年

人生の浮沈是れ天然

若し孤心の亡友に徹する有らば

感涙水と為つて九泉に到らん

墨田花可醉 蓮湖月可吟

想昔連騎豪遊日 櫻花欄漫月沈沈

錦城春暗辛未年 人生浮沈是天然

若有孤心徹亡友 感涙爲水到九泉

解説 旧米沢藩士、雲井竜雄の悲運を詠じた詩。

語釈 ※墨田花||墨田川の堤には桜が多く植えられ、素晴らしい。※蓮湖||不忍池をいう。※連騎||仲間と馬を並べて出かけること。※桜花欄漫||桜の花が咲き乱れるさま。※月沈沈||静けさを水面に映している月の様子。※錦城||花の都、江戸をいう。※春暗辛未年||竜雄が処刑されたのは明治三年十二月であり、その翌年が辛未の年に当たる。春暗といったのは、友の死を想うと暗い気持ちになる。※人生浮沈是天然||人生の浮き沈みは天のなせるわざ。※孤心||友を失って、春のにぎわいも共に出来ぬ作者の孤独な心。※徹亡友||徹は友を思う心を九泉にまでつき通す意。※感涙||友の不運に感きわまって流す涙。※為水到||亡友を想う気持ちが涙の水となって、友のいる黄泉に到るだろうという意。※九泉||よみの国。黄泉ともいい、九重になっている大地の底にたまっている泉。ここに死人がいると考えられていた。

通釈 墨田の堤の桜はすばらしい。不忍池の月は吟ずるに値する。昔が想い出させる。馬を並べて竜雄らと花月のもとで豪遊酔吟した日のことを。桜の花は咲き乱れ、月は静かな水面に影を映していた。それが友なきあとの花のお江戸の辛未の春は、わが心を暗くする。人生の浮沈は自然の営みだからしかたがない。もし、わが孤心の想いが九泉の亡き友に通じるならば、感きわまった我が思いは水となつて九泉に届くだろう。